

令和元年6月28日現在

機関番号：33306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12254

研究課題名(和文) 男性介護者のソーシャル・キャピタルの特徴を踏まえた健康支援のあり方に関する研究

研究課題名(英文) Ways of providing male caregivers with health support based on male caregivers social capital characteristics

研究代表者

彦 聖美 (Hiko, Kiyomi)

金城大学・看護学部・教授

研究者番号：80531912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、男性介護者のソーシャル・キャピタルの特徴を把握し、その特徴に基づいた健康支援のあり方を明らかにすることである。

男女介護者間の比較では、地域に対する信頼度に差はなかった。「個人的なことが話せる気楽な友人がいない」と答えた割合が、男性介護者の方が高く、町内会や老人会などの活動に参加している割合も、男性介護者の方が高かった。近所づきあいでは、「相談・生活面で協力する」が、女性介護者の方が高い割合を示し、「あいさつ程度の最小限の付き合い」が、男性介護者の方が高い割合を示すという性別特徴がみられた。ソーシャル・キャピタルの性別特徴を踏まえ、男性介護者の強みからの働きかけが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性差に着目して男性介護者のソーシャル・キャピタルを把握することは、男性介護者支援の方向性を明らかにすると共に、ジェンダーの視点を含めて社会全体で介護の課題に取り組んでいくための基礎資料として有用である。

男性介護者の中でも社会とのつながりが強いと思われる男性介護者の会に参加する者のソーシャル・キャピタルの把握と、男性介護者と女性介護者の比較を試みた。その結果、男性介護者の会に参加している者でさえ、助けを求められる友人がいないと答えた者が多かった。また、男性は女性に比べて近所づきあいは少ないが、地域の自治会等には参加していた。性別特徴から強みを捉え、支援に活かすことが重要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify male caregivers' social capital characteristics and explore the ways of providing male caregivers with health support based on the characteristics.

Even the male caregivers who participate in self-help group often said that they did not have a friend asking for help. No difference in the degree of reliance on their communities was found between male caregivers and female caregivers, but male caregivers also do not socialize with their neighbors as much as female caregivers. However, there was a gender difference, with more male caregivers than female caregivers in participation in local community associations or elderly citizens associations. From the perspective of the provision of health support to male caregivers, it is important to understand male caregivers' strengths among their characteristics in order to help them.

研究分野：在宅看護学

キーワード：男性介護者 家族介護者 ソーシャル・キャピタル 当事者の会 性別特徴

1. 研究開始当初の背景

介護者全体に占める男性介護者の割合は 3 割と推定され、増加し続けている（国民生活基礎調査，2014）。また、被虐待高齢者からみた虐待者の続柄は、男性が 6 割以上を占める（2013 年度高齢者虐待対応状況調査）。さらに、就業構造基本調査によれば、「過去 5 年間に介護・看護のため前職を離職した者」における 2002 年から 2012 年の増加率は、女性でマイナス 11.2%であるのに対し、男性では 38.7%の増加を示す。男性は離職により経済的な負担だけでなく、生きがいを失い、同世代の仲間に対する引け目を感じやすい。さらに、未婚の息子介護者も多い。このように、男性介護者は、日本文化に根強い性役割意識を背景に、社会・経済学的な課題を抱えながら孤立しやすく、健康や生活がいきなり破綻するリスクが極めて高い集団といえる（彦，大木，2013，2016）。近年、ソーシャル・キャピタルの豊かさが健康の社会的決定因子として注目されている。子育て世代から地域での活動に参加してきた女性に比べて、仕事中心の生活を続けてきた男性は特に地域レベルでのソーシャル・キャピタルが乏しいと予想されるが、その現状は十分には解明されていない。男性介護者を取り巻くソーシャル・キャピタルを量的・質的に把握することは、きめ細かな支援に対するエビデンスとしての意義が大きい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一号被保険者を介護する男性介護者のソーシャル・キャピタル（社会のネットワーク・互酬性規範・信頼関係）の特徴を把握し、その特徴に基づいた健康支援のあり方を明らかにすることである。男性介護者のソーシャル・キャピタルを詳細に把握していくことは、地域や職場における男性介護者支援の推進における重要なエビデンスとなる。

3. 研究の方法

2つの調査を実施した。調査1は、全国の男性介護者の会・グループに参加する第一号被保険者を介護する男性介護者に対する郵送法自記式質問紙調査を実施した。各会に参加する第一号被保険者を介護する男性介護者の実態とソーシャル・キャピタルを把握した。調査2は、石川県に在住する第一号被保険者を介護する介護者（男性及び女性）を対象に郵送法自記式質問紙調査を実施し、介護者のソーシャル・キャピタルの性別特徴を把握した。これらの調査をまとめ、男性介護者のソーシャル・キャピタルの特徴と、その特徴に基づいた支援のあり方の明確化を試みた。

1) 調査1：全国の男性介護者の会・グループに参加する第一号被保険者を介護する男性介護者に対する郵送法自記式質問紙調査

対象者

男性介護者の会の参加者で、第一号被保険者（65歳以上）を介護する男性介護者

質問紙調査の配布方法

全国の男性介護者の会は、(1) Web 情報、(2) 男性介護者支援のネットワークからの

情報、(3)マスコミ報道から把握し、その後は、機縁法により雪玉式にグループを探し出した。その結果、活動実態が確実に把握できたのは54グループであった。この54グループの代表者に対し、面談、電子メールもしくは電話にて、調査用紙配布の協力を依頼した。承諾が得られた男性介護者の会に同意書を得た上で、調査依頼書、質問紙、同意書(研究者用・参加者用)、返信用封筒を20人分郵送し、第一号被保険者を介護する会員に対して配布を依頼した。依頼する会員の選定に関しては、会に一任した。

調査項目

男性介護者の属性、ソーシャル・キャピタル(家族関係、近所づきあい・地域との関わり、交友関係等)、男性介護者の会への参加前後の気持ちの変化であった。ソーシャル・キャピタル測定尺度は、主に日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版、平成15年、平成17年度の内閣府調査、東京都大田区の調査(日本公衆衛生学会誌、61(2), 2014)を参考に作成した。

調査の実施期間

2017年5月~2018年5月の期間に実施した。

分析

結果は、項目別に単純集計した。男性介護者の会への参加前後の気持ちの変化は、当てはまる程度4段階を-2~+2点に点数化して分析した。集計・分析は、マイクロソフトオフィス Excel 2013, IBM SPSS Statistics version21 を使用した。

2) 調査2: 石川県に在住する第一号被保険者を介護する家族介護者(男性及び女性)に対する郵送法自記式質問紙調査

対象者

石川県内に在住し、第一号被保険者(65歳以上)を介護する男性介護者と女性介護者

質問紙調査の配布方法

石川県のホームページ上で公表されている全居宅介護支援事業所341施設に対して調査協力依頼文書を郵送し、調査協力を依頼した。承諾が得られた施設に同意書を得た上で、各施設で担当する男女介護者各10名に対し、調査依頼書、質問紙、同意書(研究者用・参加者用)、返信用封筒を配付してもらった。配付する介護者の選択は、男女が同数になるという条件以外は施設に一任した。

調査項目

男性介護者・女性介護者の実態(続柄、家族類型、文化・社会・経済学的な要因、健康状況、被介護者の状況、介護生活の状況等)、男性介護者の会の活動(活動頻度、活動内容、他会の会員とのネットワークの様子等)、ソーシャル・キャピタル実態(家族関係、近所づきあい・地域との関わり、交友関係等)である。質問項目は、日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版、平成15年、平成17年度の内閣府調査、大田の調査(日本公衆衛生学会誌、61(2), 2014)を参考に作成した。

調査の実施期間

2018年5月～2018年10月の期間に実施した。

分析

結果は男女別及び項目別に単純集計した後、一部項目で 2 検定を実施した。有意水準は 5%とした。集計・分析は、マイクロソフトオフィス Excel 2013 , IBM SPSS Statistics version21 を使用した。

3) 倫理的配慮

2つの調査は、金城大学倫理委員会の承認を得て実施した。同封した研究協力への依頼文書に、各自の自由意志によって回答を拒否できること、回答は無記名であること、得られたデータは厳重に管理すること、調査目的以外に本調査を使用しないことを明記した。公表にあたっては、協力事業所および回答者個人が特定されないように配慮した。

4. 研究成果

1) 全国の男性介護者の会・グループに参加する第一号被保険者を介護する男性介護者に対する郵送法自記式質問紙調査の結果

62名から回答を得た。回答者の平均年齢は 73.45 ± 10.3 歳、無職 51名 (82.3%)、有職 10名 (16.1%)、不明 1名であった。被介護者は平均年齢 82.5 ± 8.74 歳、続柄は妻 36名 (58.1%)、母親 21名 (33.9%)、その他父親 1名、両親 1名、その他 3名であった。

地域の人への信頼度では、信頼できる 18名 (29.0%)、どちらかという信頼できるが 20名 (32.3%)、近所の助け合いについては、助け合いがあると思う 13名 (21.0%)、どちらかというと思う 16名 (25.8%) であった。次に、家族や友人とのつながりでは、助けを求められる家族や親せきの人数は 3~4人が 21名 (33.9%) と一番多く、0人が 7名 (11.0%) であった。助けを求められる友人は 0人が 19名 (30.6%) と一番多く、次いで 2人が 18名 (29.0%) であった。

男性介護者の会への参加前後の気持ちの変化は 55名が回答した。平均 1点以上となる上位項目は、前向きな気持ちになった (68点)、自分の気持ちを他人に伝えることができた (62点)、気分転換できるようになった (60点)、人生を考える機会になった (58点)、友達ができるようになった (57点)、自分の介護のスタイルを振り返ることができた (56点) であった。一方、下位項目は、介護用品の使い方を知ることができた (34点)、自分が役立つと感ずることができた (35点)、他の介護者にアドバイスができた (35点) であった。

男性介護者の中でも社会的なつながりがあると予想される男性介護者の会の参加者に対する調査であったが、助けを求められる家族や親せきがない者や、助けを求められる友人がないと回答した者も存在し、人との関係性の構築の難しさが伺えた。一方で、男性介護者の会に参加することによる多くのプラスの効果があった。男性介護者の会は「話す」と「聴く」場、経験を共有する場として機能し、当事者が人生や生活のコントロールを自分の手に取り戻し、再構築できる効果が期待できる。男性介護者の会の果たす役割として、孤立を防

ぎ、介護生活の破綻を予防する可能性を秘めるものの、会の情報や参加するきっかけを得ることは難しい現実がある。さらに、男性介護者の集う場がない地域も多い。男性介護者の会の意義を広く周知し、全国に男性介護者の集う場を作り、社会的ネットワークを拡大する支援が望まれる。

2) 石川県に在住する第一号被保険者を介護する家族介護者(男性及び女性)に対する郵送法自記式質問紙調査の結果

石川県の全居宅介護支援事業所 341 施設に対して調査への協力を依頼し、86 施設から質問紙配布の協力を得た。その結果、男性介護者は配布 585 名中 268 名、女性介護者は配布 745 名中 423 名より返送を得た(回収率は男性 45.8%、女性 56.8%)。第 2 号被保険者の介護者を除く有効回答者は、男性 267 名、女性 416 名とした。

男性介護者の平均年齢は 68.86 ± 10.21 歳、女性介護者の平均年齢は 65.66 ± 9.37 歳であった。現在就業していない男性 160 名(59.9%)、女性 228 名(54.8%)のうち、早期退職した男性の 39 名中 13 名(33.3%)、早期退職した女性 87 名中 34 名(39.1%)が介護のための離職であった。1 人で 2 人以上を介護している者は、男性 9 名(3.4%)、女性 25 名(6.0%)であった。男女介護者の様々なサポートの状況では、困ったときの相談相手、体の具合が悪い時の相談相手、病気になったときに連れて行ってくれる人、寝込んだ時に世話をしてくれる人がいないと答えた者が、男性介護者に多かった(表 1)。

表1 男女介護者の様々なサポートの状況

	男性介護者 n=253	%	女性介護者 n=400	%	p値
1.困った時の相談相手	いる	223	88.1	385	96.3 0.0000675883 **
	いない	30	11.9	15	3.8
2.体の具合が悪いときの相談相手	いる	208	82.2	368	92.0 0.0001583227 **
	いない	45	17.8	32	8.0
3.家事などの日常生活を援助してくれる人	いる	161	63.6	270	67.5 0.3099254308 n.s.
	いない	92	36.4	130	32.5
4.病気になったときに病院に連れて行ってくれる人	いる	200	79.1	347	86.8 0.0093484913 **
	いない	53	20.9	53	13.3
5.寝込んだ時に世話をしてくれる人	いる	168	66.4	297	74.3 0.0309724017 *
	いない	85	33.6	103	25.8

**p<.01, *p<.05, n.s.(not significant)

男女介護者の家族や親戚、友人との関係の状況では、少なくとも月 1 回、会ったり、話したりする家族や親戚、友人が「いない」と答えた者は、男性介護者 28 名(11.2%)、女性介護者 24 名(6.0%)であった。個人的なことでも話すことが出来る気楽な友人の数でも、「いない」と答えた者が男性介護者 81 名(32.3%)、女性介護者 59 名(14.8%)であった。

近所づきあいでは、互いに相談したり、生活面で協力し合ったりしていると答えた者が、男性介護者 45 名(16.9%)、女性介護者 106 名(25.5%)、あいさつ程度の最小限の付き合いはしていると答えた者が、男性介護者 85 名(31.8%)、女性介護者 89 名(21.4%)であった。地域に対する信頼度は、信頼している者が男性介護者 131 名(49.0%)、女性介護者 204 名(49.0%)であった。男性介護者は、地域の自治会や町内会、老人会などの地縁組織での活動に 141 名(80.1%)が参加し、女性介護者 118 名(60.2%)より多かった。

本研究結果から、男性介護者のソーシャル・キャピタルとして、友人関係や地域での近所つきあいが女性介護者に比べて乏しいということが示唆された。しかし、地域組織への参加では、自治会・町内会、老人会などの地縁組織や政治・業界団体には男性介護者の方が多く参加し、趣味・生涯学習の会（芸術文化活動）には女性介護者の方が参加しているという傾向が明らかとなり、性別の特徴として把握された。性別特徴を踏まえたネットワークの構築や、地域での支え合いの関係作りを促進するような取り組みが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 彦 聖美：北陸3県の介護支援専門員が捉える男性介護者の特徴、日本在宅ケア学会誌、22(2)、2019、56-63、査読有
2. 彦 聖美、大木秀一：地域における男性介護者支援の推進～ソーシャル・キャピタルに着目して～2、地域ケアリング、Vol20、No1、2018、73-76、査読なし
3. 彦 聖美、大木秀一：地域における男性介護者支援の推進～ソーシャル・キャピタルに着目して～、地域ケアリング、Vol19、No9、2017、43-46、査読なし

〔学会発表〕(計3件)

1. Kiyomi Hiko、Syuichi Ooki：Support for families with male caregivers in times of disaster in Japan from viewpoints of social capital、2018.10、The 5th Research Conference of World Society of Disaster Nursing(WSDN)、Bremem,Germany
2. 彦 聖美、大木秀一：男性介護者のソーシャル・キャピタル調査(第一報) - 男性介護者の会の果たす役割 -、2018年10月、第77回日本公衆衛生学会総会、福島県郡山市
3. 彦 聖美：男性介護者に対する性別と続柄別(夫・息子)支援の方向性、2017年7月、第22回日本在宅ケア学会、北海道札幌市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

彦 聖美 (HIKO, Kiyomi)

金城大学・看護学部・教授

研究者番号 80531912

(2) 研究分担者

大木秀一 (OOKI, Syuichi)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00303404